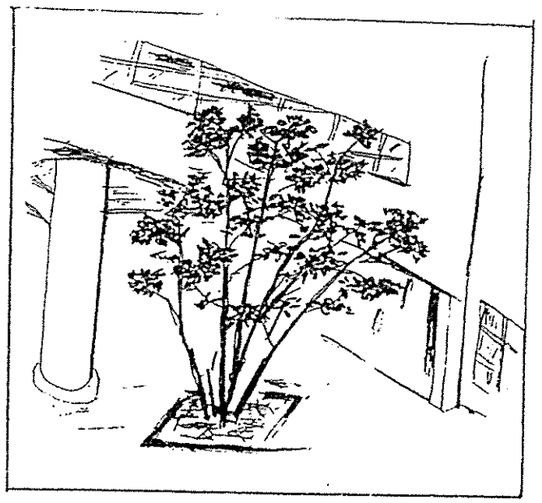
学校便り　５月号　（６・５・２）

「学校だより」に折角いただく紙面ですから、何かシリーズで毎月お話しできるものがないか考えましたが、学校にある樹木の紹介をしてみたいと思います。

よくご存じのことかとは思いますが、来校の折りには探してご覧になり、お子さんとの話題にしていただけたら幸いです。紙面に限りがありますので、全ては無理ですし、意を尽くすことも難しいと思います。もっと詳しいことや樹木に関する「ちょっといい話」などお手紙でもいただけましたら励みになりそうです。

ヤマボウシ（山法師、山帽子）



職員玄関と昇降口の間に株立ち（幹が根元から数本に分かれて伸びている様）の美しい形の樹です。学校の顔とも言えるこの広場のことを子供達は「ヤマボウシ広場」と呼んでいます。

本州、四国、九州の山野に自生し、ミズキ科に属し、大きなものは２階建の家の屋根ぐらいで、８メートルの高さになります。

新緑から夏にかけて花を咲かせます。本当の花は、中央に集まった小さなものですが、その周りにこれを保護するための苞と呼ぶ花弁のような葉がつきます。まあ、全体を花と呼んでもさしつかえないと思います。

花が集まって丸い様子は僧侶の頭、それを包む白い苞を頭巾に見立ててつけられた名前だろうと言われているようです。

ヒメシャラ

５年生が林間学校に行く箱根はこの樹の宝庫ですから、本来は霧深い山奥の優しい環境を好む樹木です。台風に乗って飛んでくる潮風などとんでもないと言うところでしょうか。

野生で、大きなものは高さ１５メートルにも達します。

ツバキ科に属しますが、白い小ぶりの花は一重の椿によく似ています。

シャラ（ナツツバキ）という樹もあるわけですが、それよりもすべてが繊細で美しいことから、「姫」の名をつけてもらえたと言うことです。

職員玄関前。茶色を帯びた樹肌が実に滑らかで、「もうひとつのサルスベリ」と呼ばれるのも頷けます。

ウーン、もうひとつ成育が悪いんだよな、これが。

学校便り　６月号　（６・６・１）

ヤマモモ（山百々）

職員玄関の横に、季節を問わず深い緑の葉を茂らせているのがこの木です。「百々」はたくさんの実をつけるという意味、６月には熟して食べられます。

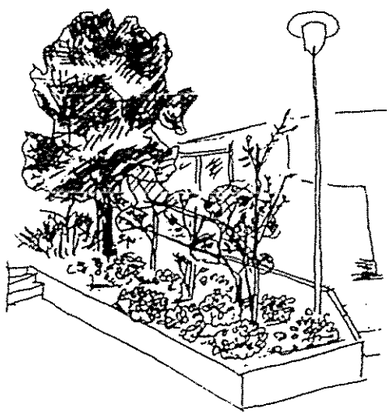
１円玉ほどの大きさで、深い赤紫色をした実は、松の葉のような香を伴った甘酸っぱいものです。古くはジャムや酒を作ったりもしたようです。

ただし、この樹には雌雄があって、実はつけるのは雌株。そうです、あの銀杏ができるイチョウとできないイチョウがあるようにです。

３月末頃、３センチほどの花穂をつけるのが雄株、本校のヤマモモはこの花を咲かせています。

耐寒性は乏しく、日本では千葉県あたりが北限とのことです。

消防車の進入路脇にも２本、立っています。



ヤマボウシ広場からスロープの下を通って運動場に出るとすぐ、２本の樹木が立っています。

メタセコイア

右側。この樹木が日本へ渡来したのは、昭和２４年といいますからまだ半世紀にもなりません。　もっとも、恐竜の時代から哺乳類が登場する頃までは、北半球各地に分布していた樹木ですから、日本にもあったものです。絶滅して「化石」でしか見ることができない植物だと思われていたこの樹木が、中国で